

## 知的障害特別支援学級における社会科の実践

### 授業形態・年間指導計画の工夫という視点から

小野村 晃太 ・ 川合 紀宗\*

#### 1. はじめに

2024年度より, 広島大学附属東雲中学校知的特別支援学級(以下, 本校特別支援学級と略記)では, 各教科等を合わせた指導(生活単元学習)に含まれる社会科・理科の内容を整理し, 教科として指導していく試験的な運用を始めている。文部科学省は, 平成29年に告示した特別支援学校学習指導要領の中で, 各教科の内容を充実させることを示した。これまでも, 本校特別支援学級では, 生活単元学習の学習を通して社会科や理科の内容を指導してきた。社会科・理科の内容を, 各教科等を合わせた指導の中で扱うことで, より生徒の生活に密接に結びついたり, 生徒の意欲・関心を醸成しやすかったりといった利点がある。一方で, 生徒が各教科等を合わせた指導の中で無意識に学んでいる社会科・理科の見方・考え方は(もちろん, 教師自身は各教科等のねらいや指導内容を意識して指導しているが), 実生活の中の特定の場面や状況で無意識的に発揮できるものであるが, ほかの似た場面や状況に応用することが難しかったり, 深化させることが難しかったりする。丹野(2022)や高阪・村上(2020)では, 「教科別の指導」と「各教科等を合わせた指導」を分けて考えるのではなく, 学習内容がその2つを行き来することで学習内容の定着や深化につながるとしている。本校特別支援学級では, この往還による定着・深化を一つのねらいとし, 社会科・理科を教科として立ち上げようと, 本年度試験的な運用を試みた。

本稿では, 本年度行った社会科の実践を中心に「授業形態」「年間指導計画(シラバス)」の2つの観点で成果と課題を整理し, 中学校知的障害特別支援学級において新たに教科として社会科を立ち上げる際の一例として提示したい。

#### 2. 授業形態

まず, 社会科・理科の授業を実施していくうえで, 時数をどのように確保していくかを考えなければならない。既存の教科等の時数に上乗せする形で実施していくには, 時間も教員の数も足りない状況であった。そこで, 現在実施している生活単元学習の時間を使う形での実施を試みた。とは言え, 生活単元学習で行っている学習内容を大幅に削ることはできない。そのため, 表1の2つのパターンで検討を行った。

本校では, 教員の確保の問題や, 国語や数学等他教科でも学年を超えたグループでの活動を行っており, 習熟度別にグループ分けをするハードルが低いこともあり, パターン1を採用し, 実施した。なお, 習熟度別に分ける際は, 国語・数学の学習状況や小学校時の社会科・理科の履修状況を材料に判断した。

実践の成果としては, 習熟度別に行ったメリットは大きく, 進度がゆっくりのグループでは発言こそ比較的少ないものの, 生徒本人の経験と学習内容を結びつける時間をしっかり確保することで, 一人一

\* 広島大学大学院人間社会科学研究科

人が納得しながら進めることができている。また、進度が早いグループでは、それぞれが知っている知識を積極的に披露し、互いの知識や経験を共有する場面が多く、授業内容以上に知識を吸収している。

一方で課題としては、やはり授業時数の少なさ(2週間に1時間)により知識の定着に難しさがある。次章で述べるように、各教科等との往還を意識した単元配列にしているものの、運用1年で定着を見取することはできなかった。

**表1 授業形態の検討**

	パターン1	パターン2
形態	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学年問わず特別支援学級全生徒(14名)をA・Bの2つのグループに分ける。</li> <li>・各グループは、週1時間社会科or理科の授業を受ける。</li> <li>・社会科・理科は隔週で交代する。</li> </ul> <p>例：第1週はAが社会科, Bが理科 第2週はAが理科, Bが社会科</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各学年</li> <li>・社会科or理科の授業を週1時間実施</li> <li>・社会科・理科は隔週で交代する。</li> </ul> <p>例：第1週は全学年がそれぞれ社会科 第2週は全学年がそれぞれ理科</p>
メリット	<ul style="list-style-type: none"> <li>・習熟度別で行うため、生徒の実態に合った内容や進度で授業を行うことができる。</li> <li>・教員の確保が比較的容易(社会科1名, 理科1名)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1年, 2年, 3年と、既習事項が確実に積み上がるため、既習事項を深めたり新しい学習を行ったりやすい。</li> </ul>
デメリット	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習内容について、各学年が在籍する集団のため、在籍する3年間で段階的に学習内容を積み上げにくい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学級担任に負担(社会科(理科)担当教員が各学年で授業する時間の確保が難しく、それぞれの学級担任が社会化(理科)を指導する形になる)。</li> </ul>

### 3. 年間指導計画(シラバス)の工夫

年間指導計画(シラバス)作成の際には、「改訂新版 くらしに役立つ社会」(東洋館出版社)の内容を参考に、以下の点に留意・工夫して作成した。

- (1) 他教科等との連携
- (2) 学校行事, 実社会との関連
- (3) 生徒の意欲・関心に結びつく内容

(1), (2)に関しては、社会科・理科を教科として教えていくねらいにつながる「往還」を意識した工夫となっている。以下、それぞれについて詳しく見ていく。

#### (1) 他教科との連携

生活単元学習の中で教えていた内容を、改めて教科として捉えなおし、既存の教科(国語, 数学等)や各教科等合わせた指導(生活単元学習, 作業学習等)それぞれの単元の学習時期を考慮し、互いに往還が促進するように単元実施時期を配置した。例えば、理科で水の流れや防災に関係する単元の学習時期に、社会科では日本の自然環境についての単元を実施する等である。

#### (2) 学校行事, 実社会との関連

(1) で挙げた授業以外に、学校生活や実際の社会との関連をもたせて単元を配置した。例えば、先ほど(1)で挙げた日本の自然環境に関する単元は、理科の内容と実施時期を合わせるだけでなく、学校行事としては避難訓練(大雨による洪水や地震による水害)のタイミングに合わせたり、実社会では梅雨や台風が多発する時期と合わせたり、といったものである。このように実施時期を学校行事や実社会とリンクさせることで、生徒が学習に向かう必然性を感じやすく、意欲をもちやすくした。

### (3) 生徒の意欲・関心を高める工夫

(2) で、生徒に学習に対する必然性や意欲をもたせることにつなげたが、より生徒が主体的に学習に取り組める工夫として、社会科の授業のはじめ(4月第1回目の授業)に、自分の家周辺の地図を描かせる活動を行った。

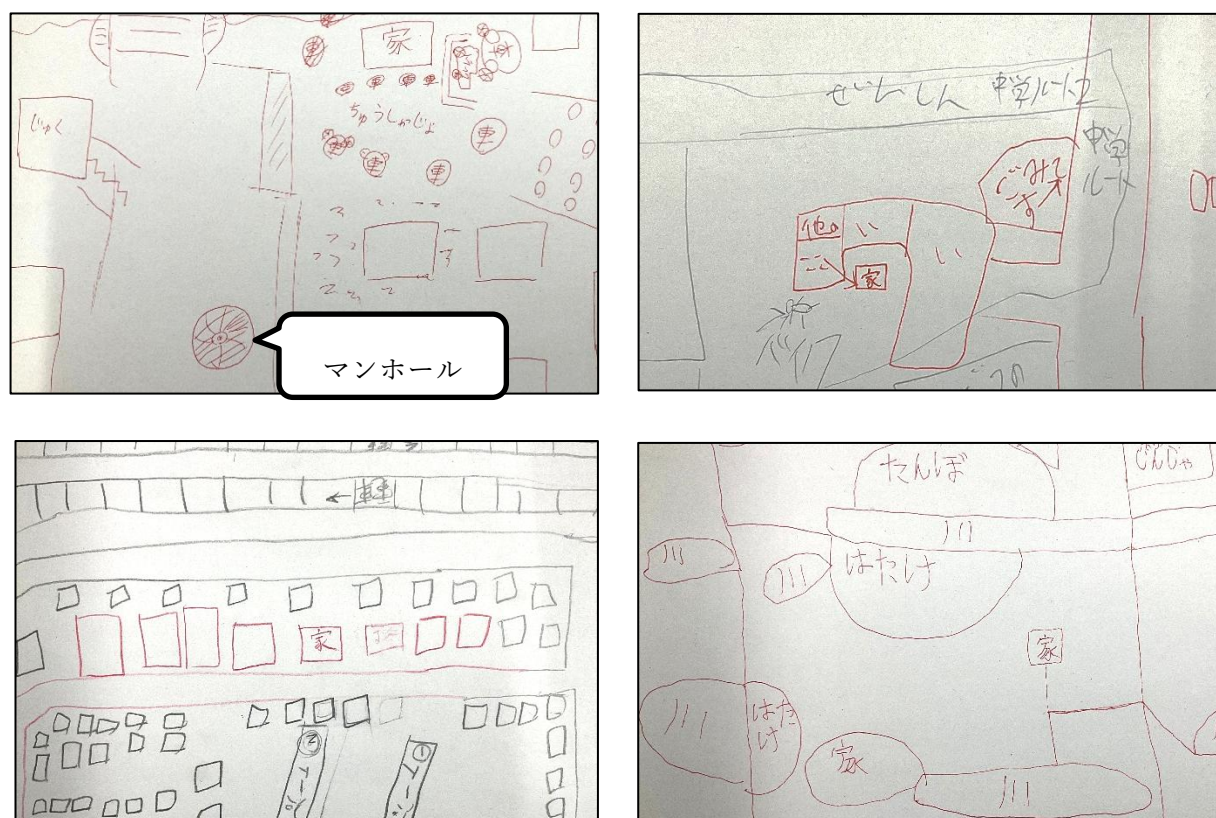


図1 生徒の描いた自宅周辺の地図(左上A, 右上B, 左下C, 右下D)

描かれた地図は、生徒が普段どのようなところに注目して生活しているのか推測する一つの手がかりになる。例えば、生徒Aの地図にはマンホールがはっきりと描かれている。これはほかの14名の生徒のどの地図にも描かれていなかった。また、生徒Bは自宅周辺の様子を思い出すのにかなり時間をかけていたが、唯一自宅近くのゴミ捨て場だけははっきりと地図に描くことができた。生徒Cは具体的に何というより、建物(の数)に注目して描いているし、生徒Dは山や川など自然環境についての描き込みが多い。この地図を、2週間に1度という少ない授業時数の中で生徒が学びを得られるよう活用した。例えば、「社会参加と公共施設の利用」という単元では、公共施設について網羅的に学習するのではなく、地図にあったマンホールから水道について、ゴミ捨て場からごみの処理についてというように、中身を精選して授業を行った。

表2 社会科の年間指導計画(概要)と各単元に関連する教科・行事等

月	社会科の年間指導計画	各教科	学校行事・実社会
4月	社会参加と公共施設の利用	・町探検(生単)	・校外学習(広島市等)
5月	・公共施設の役割・使い方	・校外での研究活動(総合)	・職場体験学習
6月	・ゴミの問題	・職場体験学習(生単)	
7月	国土の様子	・単位, グラフの読み取り(数学)	・避難訓練(地震・津波)
8月	・日本を取り巻く自然環境	・流れる水の性質(理科)	・台風シーズン
9月	・自然災害を防ぐ工夫		
10月	社会参加ときまり		・衆議院選挙等
11月	・政治の仕組み		・生徒会総務選挙
12月	日本の歴史	・研究活動(総合)	・百人一首大会
1月	産業と生活	・調理実習(家庭)	・余暇活動(買い物等)
2月	・税金について ・食糧生産	・お金の計算(数学)	
3月	世界とのつながり	・英語で自己紹介(英語)	・アメリカ姉妹校との交流

※社会科の年間指導計画の単元名は明官茂(2024)『くらしに役立つ社会』東洋館出版社を参考にしている。

※1月までは実施済み, 2月以降は実施予定である。

成果として, 学習内容にそれぞれ必ずいずれか(他教科, 学校行事, 実社会)の必然性があることにより, 学習の意欲が高い状態で授業に入ることができ, そのことが学習内容の理解を促した。また, 特別支援学級の生徒14名を対象に, これまでの学習内容について簡単なアンケートを実施した。

表3 アンケートの質問項目

1	あなたが一番楽しかった勉強(単元のこと)はどれですか?
2	これまで勉強した中で一番内容を覚えている勉強はどれですか?
3	社会科で勉強した内容で, 他の授業でもやったな, 使ったなというものはありますか?
4	社会科で勉強した内容で, 家に帰って使ったな, 役に立ったなというものはありますか?
5	社会科で勉強した内容で, 将来役に立つかもな, と思った内容はあるか?

特に年間指導計画の工夫と関係する3, 4, 5の項目について, 質問3については社会科と交互に実施している理科の内容「流れる水の性質」と災害に関連付けて避難訓練等につながりを見出していた生徒が9名いた。他にも数学やかていとのつながりを感じている生徒もあり, 「なし」と答えた生徒は1名のみで, ほとんどの生徒が他教科とのつながりを見出していた。質問4については, 「買い物の時に消費税を見た」「家族と避難経路を確認した」「ニュースで総理大臣を見た」等, 授業内容から生活へ, 生活から授業内容へのつながりを感じている生徒が10名いた。一方で4名の生徒については, つながりを見つけることは難しかった。質問5については, 「選挙」や「税金」についての回答が多くあり, 12名が将来何かに役に立つと感じている結果となった。

#### 4. おわりに

ここまで、中学校の知的特別支援学級における社会科の授業に関して、「授業形態」と「年間指導計画（シラバス）の工夫」の2つの観点で成果と課題をまとめてきた。「授業形態」に関しては、既存の生活単元学習の時間の一部を使って、特別支援学級全体を2つのグループ（習熟度別）に分け、実践を行った。習熟度別にすることで、一斉授業ながらもある程度個に応じた指導内容で学習することができる利点があったが、課題としてはやはりその授業時数の少なさからくる知識の定着の難しさが挙げられた。この難しさについては、学年別ではなく習熟度別にしたことで、同様の年間指導計画で2年目、3年目と積み重ねていくことができるという点をうまく活用していきたい。

「年間指導計画（シラバス）の工夫」では、他教科、学校行事・実社会、生徒の意欲という点で工夫して作成した年間指導計画で指導を実施した。アンケートの結果からは、生徒たちは教科間のつながりや、学校の授業と実社会とのつながりを子どもたちの目線で感じる事が概ねできていることがわかった。

今後の取り組みとして、本校特別支援学級には、青年学級や親の会という、本校特別支援学級を卒業した高校生・社会人や、その保護者からなる組織があり、本校の授業や行事で積極的に関わっている。青年学級生や親の会の方々にアンケート等を取り、その方々が社会に出た時に必要となると答えた事項を整理し年間指導計画に取り入れていくことで、さらに充実した社会科の授業につながるかもしれない。ここまでの実践から得られた課題をふまえて、今年度を含め3年間という長い見通しをもって解決できるよう今後も実践を進めていく。

#### 【 引用・参考文献 】

文部科学省（2018）『特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（小学部・中学部）』

文部科学省（2019）「特別支援学校学習指導要領等の改訂のポイント」

[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/02/04/1399950\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/02/04/1399950_1.pdf)

丹野哲也（2022）「「各教科等を合わせた指導」の意義と課題—育成を目指す資質・能力と指導の形態—」, 『発達障害研究』, 第44巻, 第3号

高阪英徳・村上理絵（2020）「「知的特別支援学級における「各教科等を合わせた指導」と「教科別の指導」での学びをつなげる実践の在り方の検討」, 『特別支援教育実践センター研究紀要』, 第20号 33 - 41

明官茂（2024）『くらしに役立つ社会』東洋館出版社

本宮久仁彦・橋本創一（2023）「知的障害特別支援学校中学部における教科指導の実践研究—社会科授業の単元ルーブリックを活用した学習評価—」, 『発達障害支援システム学研究』, 第22巻, 第2号